海外だより

南半球の福祉国家

——ニュージーランドの印象——

社会保障研究所　山崎泰彦

I

このたび，社会保障研究所より海外出張の機会が与えられ，1月初旬から3月下旬までの約2カ月半，ニュージーランドとオーストラリアを訪問した。公式の訪問目的は，いうまでもなく，社会保障の実情調査であった。しかし，訪問を終えた今の私は，進んだ社会保障の姿には勿論のことであるが，両国の人々のホスピタリティと自然の美しさにも，すっかり魅せられてしまっている。社会保障の実情については，いずれ別の機会に紹介したいと思う。そこで，今回はとりあえず，最初に訪問したニュージーランドの印象記を書いてみたい。

今回の出張に出かける前，私の同僚たちの多くは，私がイギリスに行くものと決めてかかっていたようだ。私の社会保障研究は，イギリスの歴史的研究から始まったのだし，また，今なおわが国では，イギリスが社会保障のメッカだと考えられている。同僚たちがそのように思ったのも，別に不思議ではない。

しかし，あえて私がニュージーランドとオーストラリアを選んだことには，それなりの理由があった。わが国ではそれほど注目されていないが，これら両国の社会保障は，ヨーロッパ諸国と比べても決して遜色のない，しかもユニークな内容を備えている。ところが，本格的な研究をすすめるうえでは，文献や資料を入手しにくいという制約があり，ぜひとも直接に訪問したいと思ったのである。その他，観光上の魅力，外国旅行の経験に乏しい者にも不安なく旅行できる国だということ，あるいは日本の冬をエスケイプし夏を楽しめることも，私の気持を引きつけた。

しかしながら，何といっても私には初めての外国である。それに，精神的にも肉体的にも，私は決してタフではない。とくに，体の面では，3年前に結核で倒れていたので，必ずしも万全の状態ではなかった。こうした点で，友人や家族はずいぶん心配していたようだ。しかし，私の性格から判断して，何かトラブルが起るとすれば，それは外国で日本人としてふるまえないというストレスによる，多分に精神的なものではないだろうか？　そのように考えた私は，「郷に入れば郷に従う」心構えをした。要するに，日本人であることを忘れてしまおうと思った。元来，和食が好きで，漬物や味噌汁の欠かせない私だが，これら日本への郷愁をさそうものは一切持参しなかった。かなりハードなスケジュールであったにもかかわらず，意外と気楽に研究と旅を楽しむことができたのは，この頭の切り換えが成功したからであろう。

II

ニュージーランド訪問にあたっては，平石長久氏のすすめにより，直接に社会福祉省のDirector－General 宛に手紙を書き，仕事の面での一切の世話をお願いした。そうして，ウエリントンでの3週間の仕事の日程については，社会福祉省のMr．T．Baker 氏が，私の希望通りに組んでくれた。ただし，日程はかなりきつく，週末を除いては，ほとんど連日，午前，午後とも訪問に追われた。訪問先は，社会福祉省（本省の他に，業務センター，パーマストン・ノース地方事務所など），保健省，災害補償委員会，大蔵省，政府退職年金基金，ウエリントン病院，ビクトリア大学，公務員労働組合，医師会，労働党，国民党，経営者連盟，サザン・クロス医療保険会社などであり，この間に地元の日刊紙“The Evening Post”の記者から逆にインタビューをうけたこともあった。

毎日の訪問にあたっては，本来なら前もって十分な準備をしておくべきなのだろうが，私はほとんどそれをしなかった。というよりは，資料が入手しにくいということもあって，もともと，ニュージーランドの社会保障に関する予備

知識が私には欠けていたのだから，準備しようがなかったともいえる。もっとも，最初の訪問としては，この国の社会保障の基本的な特徴点さえつかめば，それで十分だろう，と思っていた。

ニュージーランドの社会保障の最もユニークな特徴点は，所得保障部門において（災害補償のみが例外），社会保険も公的扶助も事実上存在せず，全体がいわゆる「社会扶助」的なシステムにもとづいて体系化されていることであろう。すなわち，租税によって費用が賄われ，給付はフラット・レート，しかも多くの給付がインカム・テストを条件としている。資格要件は，インカム・テストの他には，居住要件があるのみであり，短期の給付や家族給付の場合は1年間，最も長い老齢年金の場合でも10年間の居住で，国籍を問わず支給される。

このようなユニークな社会保障が形成された背景は何か？　インカム・テストをベースにした社会保障が果して効率的に機能しているのか？　今後，社会保険方式にもとづく所得比例の拠出・給付が採用される可能性があるのか？……これらの点こそ，私の最大の関心事であった。訪問を終えた今，私なりにこれらの疑問に対する一応の解答をえることができた。いずれ別の機会に論じてみたい。

Ⅲ

ニュージーランドの社会保障給付費を対ＧＤＰ比でみると，1971年では10.5％であるから，先進諸国ではむしろ低いグループに属している。けれども，実際にこの国を訪問してみて，このような指標でもって福祉水準を判定するとすれば，見当違いもはなはだしいということを痛感した。要するに社会保障は，所得再分配のしくみなのだ。所得の分配が平等化し，生活の基盤が安定していれば，社会保障への依存度は当然に低くなる。例えば，この国には，世界最初に制定されたすぐれた最低賃金制がある。住居をみても，持家率は75％と高く，日本人が通常考えるようなスラムはどこにも見当らない。租税負担率は国民所得比で38％，しかも所得税が全租税収入の70％を占めているから，この面での所得再分配もかなり強力だとみてよい。さらに私が驚いたことは，ニュージーランドでは，貧困という言葉はほとんど使われず，公式の貧困線も公的扶助も，事実上存在しない，ということであった。

当り前のことだが，社会保障を必要としないような状態こそ，本来望ましいものであって，社会保障と福祉とは次元の違うものなのだ。そうして，福祉とは暮らしやすさのことだとすれば，ニュージーランドが世界で最も進んだ福祉国家の１つであることは間違いないであろう。この点について，ある旅行家が次のように話していたのを思い出す。

「しばしば，スウェーデンが世界最高の福祉国家だと言われるが，その反面，老人の自殺が意外に多いということも指摘される。実際に，スウェーデンに生活して，あの長く厳しい冬を体験すると，体力が衰え，将来に希望のもてなくなった老人たちが死を急ぐ気持がわかるような気がする。その点では，ニュージーランドの気候は，夏は涼しく冬も暖かい。自然の美しさはいうまでもない。天国へ行く前に，１日でも長くゆっくり休養したくなるような国だし，またあのような国を通って天国へ行ってみたい」

南十字星，氷河，フィヨルド，キウィ……の国ニュージーランドの美しい自然の紹介は，観光案内書にまかせよう。たしかに，気候や自然に恵まれることは，暮らしやすさの重要な要件であろう。けれども，福祉国家ニュージーランドを支える，それ以上に重要な支柱になっているのは，親しみやすい人々の人柄と，健全な市民生活であろう。以下，この点について述べてみたい。

Ⅳ

ウエリントン空港に着いたとき，最初に目にとまったものは，建物の壁に大きな文字で書かれていた“Welcome to New Zealand. Tipping－A Way of Life in Some Countries is not a Custom in New Zealand”という言葉であった。この国でチップが不要であることは，私自身は旅行案内などで既に承知していた。けれども，外国からの訪問者に対して，歓迎の言葉と同時にそのことを徹底させようとする，その姿勢のなかに，世界で最も早い時期に各種の

社会立法を導入したこの国の歴史の重みを発見し，感動した。ニュージーランドの人々のすばらしいホスピタリティに接すると，不要であるとはいいながら，自然の気持ちとして，チップを出したくなる。しかし彼らは決して受取らない。

また，泥棒もいないらしい。夕方，ホテルに帰ってくると，決って窓が開き放しになっている。メイドが部屋を掃除をしたあと，換気のため，そうしてくれているのだ。最初のうちは，盗難があるのではないかと心配だったが，それも杞憂に終った。大体，夜でもシャッターを下している店はほとんどなく，それどころか，ウィンドウ・ショッピングが楽しめるように電灯がつけ放しにしてあるくらいだから，本当に盗難の心配はないのだろう。

ところで，今回の訪問では，公式の仕事以外に，民間の一般の人たちとも交流を深めたいと思い，日本に関心を持つ人たちの団体であるJapan Society of New Zealand の人たちとも接触した。ウェリントン空港では，この日本協会の会員であるMr．McCannさんの出迎えをうけて感激したのだが，それどころか，McCann さんは，ウエリントンでの３週間，自宅に滞在するようさそってくださった。初対面の私に対する好意として，これ以上のものがあるだろうか？　ところが，McCann さんは，４～５年前に奥さんに先立たれ，現在は19才の長女を筆頭にして，６人の子供のめんどうを１人でみておられるという。そこで，氏の好意はとても嬉しかったが，あまり御迷惑をおかけしてもいけないと思い，週末の１月14日から16日までの２泊３日だけお世話になった。なお，15日の夕方から夜，McCann さんのお宅で，日本協会の会員や近所の人たち約30人が，私のために歓迎パーティを開いてくださった。

ニュージーランドには，いわゆる夜の歓楽街はどこにもないし，しかも土曜日と日曜は，一部の中華料理店を除くと，全ての店が閉ってしまう。一般の観光客はたいくつしてしまうかも知れない。しかし，この国の人たちは，週末には，庭いじりをしたり，ピクニック，スポーツに興じる。また，頻繁に家族ぐるみで家庭を訪問し合い，ささやかなパーティを楽しむ。ウエリントンでの３週間の間に，日本協会だけでなく，ビクトリア大学の社会学・社会福祉学部のパーティにもさそってもらったし，その他，個人的に３人の人が自宅での夕食に招待してくれた。このなかには，昼食時にレストランで隣り合せになったというだけの縁で，招待してくれた新婚さんもいる。

とかく先進国というのは，産業や物質的な福祉は発展していても，その反面，盗難や暴力がはびこり，ポルノが氾濫しているという具合に，近代社会の病気が同居している。その点では，ニュージーランドの市民生活は実に健全だし，人々は穏やかで，ホスピタリティにあふれている。あとで，８日間の南の島の旅行を楽しんだとき，途中で，マウント・クックの写真をとりに来ていた「山と溪谷社」の写真家２人と会ったが，その時彼らは，「世界中をかけ回ったが，ニュージーランドの人たちほど素朴で親切な国民は他にいない」と語っていたから，私だけの独断的な意見ではないと思う。

最後に，21世紀に生き残れる国は，福祉が発展し，人種差別がない国だといわれることがあるが，ニュージーランドはまさにそういった条件を備えた国だと思う。この国の人口の89.5%はイギリスを中心とするヨーロッパ系であるが，その他に原住民であるマオリが7.9％，ポリネシア人1.6％，中国人その他が1.1％である。これらの少数民族の人たちの何人かに，「差別があるか？」と聞いてみたが，いずれも「ない」という返事がかえってきた。

作家の森村桂によれば．ニューカレドニアが「天国に一番近い国」だそうである。だとすれば，ニュージーランドは「天国に二番目に近い国」ということになるかも知れない。何はともあれ，もう一度行ってみたい国であることには変りない。